

紙芝居における舞台の役割

菅 舞香

The role of the stage in Kamishibai Maika Kan

Abstract

The wooden frame used for performing kamishibai (paper theater) is called a “stage,” and it has been used since the early Showa era when kamishibai originated. However, it is often not used in childcare scenes today for reasons of convenience. Nevertheless, the frame serves as a medium that draws the audience into the world of the play when the curtain opens and the story begins. In street kamishibai, which gained popularity among children, the frame was an indispensable element that separated the real world from the world of the story. This paper discusses the role and importance of the stage in kamishibai from the perspective of theater.

Keywords: Kamishibai, Drama, Stage, Curtain

1. はじめに

紙芝居を演じる際に使われる木製の額縁は、舞台と呼ばれ、紙芝居が誕生した昭和初期から使用されているが、現在、保育の場では利便性を理由に使用されないことも多い。しかし舞台は、幕が開きお話が始まると、観客たちを芝居の世界に引き込む媒介であり、子ども達に人気を博した街頭紙芝居においても、現実世界と別世界とを分けるものとしてなくてはならない存在であった。

紙芝居は、絵本と違って一人で楽しむことができない。裏の脚本を読めば表の絵を見ることはできない。紙芝居とは、演じ手と観客がいて初めて成立する「芝居」である。そのため、絵本と比べて地の文が短く、会話を重ねることで物語が進んでいくという特徴がある。観客たちは場面と感情を共有し、観客の反応は、演じ手の演技にも影響を与える。紙芝居とは、演じ手と観客双方で作上げる劇空間なのである。本論文では、紙芝居における舞台の役割と重要性を、芝居という観点から論じる。

2. 舞台のつくりと効果

紙芝居の舞台は木製で重く、日常の保育の場では敬遠されやすい。筆者の子どもたちが通った園でも、お昼寝の前やおやつ後に紙芝居が演じられる機会が多くあったが、紙芝居は椅子に座った保育者の膝の上に置かれ、舞台が使用されることはなかったと聞く。木製の舞台は膝の上に置くことが難しく、テーブルや台が必要となる。手間がかかるが、これによって画面が固定され、観客である子どもたちの視点が安定する。紙を抜いたり挿したりする際

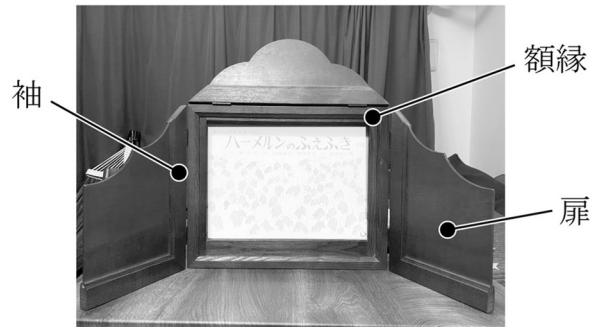


図1 紙芝居舞台

に、画面が揺れて注意がそれるということを防ぐ。

ここで、舞台のつくりについて見ておきたい。図1は現在一般的に使用されている紙芝居の舞台である。前面に開閉可能な扉がついており、これが舞台における幕の役割を果たす。

「おはなしのはじまり、はじまり」という掛け声とともにこの扉が開くと、ここで初めて紙芝居の表紙が現れ、タイトルが読み上げられる。子どもたちは、舞台の中の世界にぐっと引き込まれる。まさに物語の幕開けである。左右に大きく開いた扉は、紙を抜きさしする演じ手の手元を隠してくれる効果もある。そして終演の際は、最後の1枚の絵の状態での扉が閉じられる。再び最初の表紙に戻さないことで、物語の幕引きがスムーズに行われる。舞台を使用することで、現実世界と物語世界の境界が明確になり、観客は物語に集中できる。演じる場の都合で、舞台の扉が使えない場合は、幕紙といって何も描かれていない紙を、紙芝居の最初と最後に持ってきて、幕開け、幕引きに使用することもある。あるいは舞台額縁の上部にカーテンを付けて、幕の代わりとする例もある。

次に額縁に注目する。額縁の左右は袖と呼ばれる。紙芝居は、右手で抜きさしするつくりになっているので、演じ手が表の1枚を抜くと、観客には向かって右側から新しい場面が現れ始める。このため、舞台右側を上手、左側を下手と呼ぶ。演劇の舞台と同じである。

演劇の舞台では、袖はふところとも呼ばれ、観客から見えないことから、出番を待つ役者の控え場となっているが、紙芝居においても、額縁は画面の上下左右の端に、隠れて見えない部分を作ってしまう。しかし市販の紙芝居は、敢えてこの部分を生かす形で作られている。紙芝居では物語の途中で、紙を半分まで抜いて、前の画面と新しい画面の半々で、1枚の絵を構成することがある。この時に、袖が古い画面を隠してくれる。舞台を使用しなかった場合、画面上に同じ人物が二人登場するといったことが起きてしまう。

さらに、観客に見える必要のないページ番号などの情報は、額縁に隠れる画面下部に配置されている。

3. 芝居という原点

紙芝居の舞台が、どのような形で出来上がったのか、紙芝居の歴史とともに見てみたい。現在の形式の紙芝居は、昭和初期に街頭で演じられるようになった街頭紙芝居に始まる。明



図2 立絵
今井『紙芝居の実際』
より抜粋



図3 街頭紙芝居
1971年の福岡県筑豊地区
鈴木『紙芝居がやってきた!』
より抜粋

治、大正期、縁日や祭礼になると小屋掛けといって芝居や見せ物の興行のために、境内に仮小屋が作られた。そこで演じられていた紙人形芝居（立絵）は、やがて縁日以外にも街頭に出て営業されるようになる。紙に絵を描いて切り抜き、竹串を付けた人形を動かして演じられる、現在のペープサートのような形式であった。紙に描かれていたことから、当時はこれを紙芝居と呼んだ。この紙人形芝居がさらに形を変え、絵の描かれた複数の紙を順番に抜いて場面を展開する、現在のような紙芝居へと発展した。平らな紙を見せることから平絵と呼ばれ、紙人形芝居の立絵と区別される。この平絵が街頭紙芝居の発端であり、昭和30年代まで子どもたちに絶大な人気を博した。

さて、小屋掛け時代の立絵は、間口180cm、奥行き270cmの仮小屋で、高さ90cmの台上に舞台を設置して上演されていた（石山,2008:26）。これが街頭に出て演じられるようになる、舞台は一人で持ち運べる大きさに小型化した（図2）。横幅約90cm、高さ約48cm程度（畑中, 2017:136）の箱に黒幕を張り、その中で紙人形を上手、下手に移動させて操った。当初は図2のように舞台を肩に担いで移動する形であったが、後に自転車の荷台に固定する形も登場した。

東京で指物師として箆笥や長持ちを作っていた森下貞三（1892年生まれ）は、近所に住んでいた紙芝居の配給元（貸元）から、立絵舞台の制作を依頼されたことを述懐している（畑中, 2017:17）。立絵の上演には舞台が必要不可欠で、10個ほど制作したという。この貸元は松島屋と言ったが、後に森下はこの貸元を引継ぎ、紙芝居業に転向した。紙芝居の形態が立絵から平絵に移った後も、舞台は自ら制作していた。

1930年（昭和5年）、永松武雄の絵によって、初めて平絵の紙芝居『魔法の御殿』が作られ、街頭で実演された。当初は舞台は使用されず、また紙は横抜きでなく縦抜きであったが（石山,2008:45）、平絵の人気上がる中で、自転車の荷台に舞台を固定する形が一般化した（図3）。舞台の大きさは、横52cm、縦46cm程度である（鈴木, 2007:37）。また舞台の下は、木製の引き出しになっており、紙芝居や拍子木などの道具、子どもたちに売る駄菓子をを入れる構造になっていた。

以上見てきたように、現在の紙芝居は、小屋掛けで演じられた立絵が前身で、舞台から発展してきたものであった。上演場所が、小屋掛けを離れ街頭に出た後も、運搬のしやすさ、上演のしやすさから、舞台は欠かせないものであった。紙芝居は元来、芝居であり、舞台とは切っても切り離せないのである。

4. おわりに

筆者が担当しているスクーリング授業「言葉」では、グループワークとして紙芝居の制作と実演を行っている。各グループ4名から6名に分かれ、半日かけて紙芝居を脚本から制作する。出来上がった作品は、練習を経て、午後の発表会で他グループの前で実演される。学生たちはこの発表会を通して、演じ手と観客の両方の立場を体験する。他グループの実演を見ることで、より良い演じ方について考える。発表会の後に書かれた学生感想文の中に、実演時の紙芝居の固定について指摘するものがあった。

1人の人が紙芝居を持ったままにしないと、小さい子どもだとどこを見ていいのか分からなくなると思うので改善したいです。(2018年度)

この時授業では舞台を使用していなかった。また発表会での演じ手は一人とは限らず、グループワークであるので、協力してグループ全員で演じることも多い。紙芝居を教卓に置いて、複数の演じ手が裏で入れ替わるグループもあるが、横並びになった演じ手の手元を紙芝居が移動していく形を取るグループもある。感想文は、後者のケースについて言ったもので、それでは観客である子どもが混乱すると指摘したのである。観客の視点と紙芝居の固定についての気づきは、非常に重要なものであった。観客が集中して物語世界に入り込むには、画面が安定していることが不可欠で、劇空間を作り出す上で、舞台は物語世界と観客をつなぐ媒介となっていると言える。以上の点を踏まえ、今後の授業では効果的な劇空間の形成についても取り組んでいきたい。

参考文献

- 石山幸弘 (2008) 『紙芝居文化史—資料で読み解く紙芝居の歴史』 萌文書林
- 今井よね (1934) 『紙芝居の実際』 基督教出版社
- 鈴木常勝 (2007) 『紙芝居がやってきた!』 河出書房新社
- 畑中圭一 (2017) 『紙芝居の歴史を生きる人たち-聞き書き「街頭紙芝居」』 子どもの文化研究所